

# 伊勢における日記文学形成の可能性について

守 屋 省 吾

## 一

伊勢集の冒頭の約三十首余りは形態的には家集を昇華して歌物語にまで発展しており、贈答歌と詞書が渾然として伊勢の人生を内面的に構成しようとしている。この冒頭歌物語部は後続の家集部、西本願寺本の歌番号をもってすれば三四番以降と形態上あまりにも大きな差がある故をもって、つとに伴信友は「表章伊勢日記附證」において、伊勢自身が一纏りの日記として纂集したものと考えている。近くは玉井幸助博士、岡崎知子氏<sup>(1)</sup>などが信友説に同じておられる。これに対し、関根慶子博士は冒頭歌物語部の現存伊勢集形成過程における非独立性を強調されている。その主旨は西本願寺本三二番<sup>(2)</sup>

うためすおくにかきてまいらす

山がはのおとにのみきくもしきをみをは

やながらみるよしもがな

が、歌物語部へ帰属するとも思えずさりとて後続家集部の冒頭は公的詠作群であって、これに属する詠とも見えず、歌物語部と後続家

伊勢における日記文学形成の可能性について

集部との境界がはなはだ不明瞭であること、伊勢のごとき歌仙的な人の嘗為として独立した歌物語が存在したとするならば、どこかにその名が記載されて今日にまで伝承される可能性が充分考えられるが、それも認められないこと、形成の過程で独立した歌物語が後続家集部と結合せしめられたとするならば、両者の間には重複歌が相当数あることが予想されるが、それも認められないこと、実際には西本願寺本三二番「我まねく……」が歌仙本三〇番、三三番に見られるごとく、元来重複歌であったと推定されるのみであること、などである。また三二番の歌が古今集雑下に「歌めしけるととき、たてまつるとて、よみておくにかきつけたてまつりける」との詞書で採録されており、この詞書から古今集撰集資料に供するためと思われる伊勢自纂の家集が存在したらしいことを思わせるが、この自纂家集が現存伊勢集の歌物語部ではあり得ないことを関根博士が説かれている。さらに拾遺集雑秋に見える中務と村上天皇の贈答歌

しぐれつゝふりにし宿の言の葉はかき集む

れどとまらざりけり

御かへし

昔より名だかき宿の言の葉はこのもとにこ

そ落ちつもるてへ

に付された詞書「天曆の御時伊勢が家の集めしたりければまゐらすとて」は伊勢の家集が存在したことを明瞭に物語っている。これが古今集によって存在したと推測される伊勢自纂家集であるのか、中務が母の詠作を特に後撰集纂集資料として他撰したものであるのか、定かではない。仮に中務の撰になるものであるとすると、この家集が現存伊勢集かとも思われるが、後撰集と現存伊勢集との資料関係が認められず、中務撰の「伊勢が家の集」と現存伊勢集とは別個のものであることについても関根博士の詳細な御考察によって理解できる。現存伊勢集が古今集の詞書によってその存在が推測される伊勢自纂家集ではなく、また後撰集纂集資料として奉った中務撰の伊勢集でもないということになると、今のところ現存伊勢集の纂集者が誰であるのか全く比定できない。ここではただ関根博士の御高説に与して、現存伊勢集の冒頭歌物語部が後続家集から独立したものでなく、また冒頭歌物語部は伊勢自纂になるものでないことを確認しておきたい。

伊勢の晩年から後撰集時代にかけては、家集の歌物語化が顕著に現われている時期であるが、伊勢集冒頭歌物語部がかかる時代風潮を反映して成ったものか否かはともかくとして、特異な性格を有している。伊勢集に比較的近接している中務集、本院侍従集なども形態的に歌物語化が認められる。中務集にあっては、前半部に主として公的詠作を集約し後半部にいわゆる藝の歌群を置いており、一往の纂集意識は認められるが、明瞭なものではない。特に歌物語化の

傾向の強いのは藝の歌群においてであるが、そこでは中務その人を浮彫することもせず、主題に基づく統一理論も認められず、交友と交友における贈答歌を難纂的に集めたという体であって、歌物語的要素といえれば詠作事情を物語る詞書が多少精緻になっているに過ぎない。本院侍従集にあっては、ほゞ七年間ほどの兼通との恋の変遷を主題に据え、中務集に較べれば統一された歌物語の理論に裏打ちされているが、恋の変遷という歌物語化するに恰好の主題と素材がありながら、時間の経過に追順して平板な纂集に終始して、本院侍従の人生や内面生活に深く関わるというところまで進化していない。

それに本院侍従集とはいいい糸、人物に対する焦点は兼通に合わされておき、かかることから山口博士は兄伊尹の文芸的、政治的華々しさに対抗すべく、特にいわゆる「豊蔭」なるものを意識して、兼通が己れを主とした家集を本院侍従に命じて製作させたものと考えておられる。家集の歌物語化という風潮下にあつて纂集されたこれら女流私家集が、或は纂集意識が未成熟であるが故に藝の歌を難纂的に集合した程度で終つていたり、或は纂集意識と主題とが相当度まで成熟したにもかかわらず、結果的には平板なものに墮してしまつているのに対し、伊勢集冒頭歌物語部は高度に昇華した歌物語になつている。一介の受領の女として品高き宇多帝の後宮温子の許に出仕し、温子の弟仲平の愛を身分的差から危惧しながらも受け入れたしたもの、予想にたがわず仲平は時の大将に擢どりされた結果、うら若き女として憂き目をつぶさに体験させられ、一時は父の任国大和に身を去りはしたが、温子や親の勧めもあつて再び後宮に出仕する。出仕した伊勢に対し相も変らず仲平は挑みかかり、それ

ばかりか兄時平までも彼女の心を靡かせんと手管を弄するが、彼女は一度愛の破綻を体験し、その悲哀を凝視したからには、これら貴麗からの懸想を頑として受け入れようとはしない。はたまたあはつき好き者たちまでが伊勢の心中を知つてか知らぬか言い寄るが、色よい態度を示す筈はない。このようにいわば精神的苦悩を浄化するべくすごし来たところ、思わざる幸運が到来する。それは宇多帝の寵幸とそれに続いての皇子出産であった。親たちはこの上もない幸運と狂喜するが、伊勢として快からぬ筈はない。しかし、この喜びもつかの間、皇子は夭折しまたや女としての悲哀を体験することになり、生きることのせめてもの慰めは温子の寛大な心情と主従を越えた処遇とであつてこれを絆として生きつつあるというところで歌物語は終るともなく途絶えている。かかる物語文脈によつて展開されている歌物語部において、特に留意させられるのは、文脈が適度に起伏していることもさることながら、伊勢の人生の現象的表層を平板に追うということではなくして、心理的精神的内面に深く関わりながら、その軌跡を追いつつ一女性の人生を再構成せんと試みている点である。伊勢の人生に底流する女としての悲哀を主題として構成された歌物語部の纂集者は、はたして伊勢の実人生をどこまで知悉していたのであろうか。問題は、伊勢という歌仙的な歌人についての表皮的な知識が歌語的に伝承し、加えて偶々伊勢の自纂家集を入手したところから、纂集者が仲平との恋の破綻、平中との交渉、宇多帝の寵愛、皇子出産等々、外面的な諸象を骨子として恣意により歌物語部を創作したのか、或は人的関係において纂集者が伊勢に近接していたが故に伊勢の精神生活を知悉していたところから

家集を纂集するにあつて、現に見る如き歌物語部を構成したかである。もちろん、我々は己れの過ぎし実人生を自照するところに存立する日記文学にしても、往々にしてその記述が臆化や事実を婉曲していることを知っている。況や他家纂家集で歌物語化されたものにあつては、臆化表現が介在するのは当然のこと、さらには物語文脈を優位に展開するべく歴史的事実であろうとも変改することは充分あり得る。伊勢集冒頭歌物語部についてもこのことは予想される。文学的真実と個人的事実とはあくまで別個のものであるということを確認しながらも、本稿においては以下未完成ではあるが、一箇の独立した歌物語として充分通用する伊勢集冒頭歌物語部が、はたして伊勢の実人生に近接しているのか、離隔しているかをせんさくせんとする目的は、伊勢の実人生にできるだけ接近して、彼女の文芸的可能性、就中日記文学の可能性を探らんがためである。

## 二

歌物語的傾向が濃厚な私家集、それが他撰である場合には、纂集者の恣意による虚構が介在しがちである。しかし、一個人の実人生における独詠歌、贈答歌を素材として歌物語の文脈に従つて人生を時間的に再構成するのであつてみれば、空想と思惟の所産である仮作物語とは違って、詠作という厳然とした素材があつての物語化であるから、纂集にあつて詠作者の実人生を大きく変改するということはまずあり得ない。仮に虚構が介在するにしても、部分的なものに過ぎないと思われる。ただ考えなければならぬのは、私家集は往々にして他者の詠が混入していることが多いことである。こ

の現象は雜纂的な家集に多く、類纂的な家集、歌物語的な家集には少ないようである。だが全くないとは言いつれない。もし他詠をも包含しての歌物語化であると、これは大きな虚構ということになる。この点伊勢集冒頭歌物語部はどうであろうか。

まず一番の「ひとすまず……」及び二番の「なみださへ……」の二首は素性集流布本系に、

みづのをの御門のかくれ給へるを白河にかへさのほらへし侍  
しに

人すまず荒れたるやどをきてみれば今ぞ木葉は錦也ける

又こき紅葉を見るに折しもしぐれのすれば

神無月しぐれにそひて古郷は紅葉の色もこさまさりける

と見え、素性集では二首とも素性の詠としており、伊勢集と大きく異なる。しかし、この二首は素性の詠ではない。この二首が包含されている歌仙家集系統素性集には中間三十首及び後部四首の計三十四首が増補されていて、上述の二首は後部四首のうち（6）に含められ、歌仙家集系統の錯簡であることについてはすでに鈴木一雄氏によって結論されている。さらに蛇足を加えるならば、伊勢集と素性集との成立時のかねあいである。現存伊勢集の成立は後撰集期と明確には言えないまでも、そう多くは離れていないと見做され、一方素性集にあつては、その形成事情が三十六人集の数を合わせるべく、三代集（拾遺抄も含む）より素性の詠を抄出して纂集されたという鋭い洞察がつとに香川景樹によってなされている。この見解は群書類従本によって導き出されたにしても正論であるべく、従つて現存素性集の祖本の成立は拾遺集以後、三十六人集成立以前、年代にして長徳四、五年以後ということである。問題の二首を包含していな

い素性集の古形を伝えている西本願寺本でさえ成立が長徳四、五年以後という、伊勢集成立時からかなり後行していると思われ、ましてや西本願寺本系統に増補、錯簡が生じて成つた歌仙家集本系統に至つては、平安朝末期に成立していることを思うと、もはや二首が素性の詠ではなくして、仲平、伊勢の詠であることは疑うべくもない。従つて、伊勢集冒頭歌物語部のこの部分は他詠をもつての虚構ではなく、仲平、伊勢の直接体験から詠出された歌をもつて物語化している。

次に問題になるのは伊勢の詠ではないが、仲平の伊勢への贈歌である十四番「よひのまに……」が類従本系業平集に見られる。また後撰集悉三には「宮づかへし侍りける女程久しくありて物いはむといひ侍りけるに遅くまかりければ」との詞書で仲平の詠として採録されているが、八代集全註に「枇杷左大臣——三本に如此。一本になりひらの朝臣とあり」と見え、後撰集にあつても古くは一本に業平の詠とあつたことが判る。この点につき早くに疑問を持ったのは清輔であり、袋草子に「予按之、此始男トイフハ如集ハ仲平也。御息所ハ七条后也。若仲平ヲ書誤歟。但後撰之時仲平大臣也。雖不可書名、和讒之人所為。又業平元慶四年卒云々。七条后仁和四年十月六日入内、如此時代相違、凡業平会合伊勢事有疑」と指摘している。しかし、この疑問は業平と伊勢が時代的に隔つてゐること、業平集の形成事情が古今、後撰集より業平の詠を抄出して輯成され、その折業平集纂集者が由つた後撰集が右の詠を業平としていたことから惹起した誤りであつて、（8）仲平の詠であるとするべきことについては吉田堯文氏、鈴木知太郎氏が説かれている。なお、群書類従本

業平集の

伊勢といふ人に

いせの海に遊ぶ蟹とも成にしか波かきわけてみるめかつかん  
とある歌が伊勢集四六〇、四六一番に

人のいひたりし

伊勢のうみにあそぶあまともなりにしかなみかきわけてみるめか  
づかむ

かへし

おぼろげのあまやはかづくいせのうみのなみたかいそにおふるみ  
るめは

との贈答歌形式で採られているが、「いせのうみに……」が業平の詠  
ではなくして、仲平のそれであることは、前述の「よひのまに……」  
の歌と同様である。伊勢集冒頭歌物語部において伊勢の詠歌中及び  
彼女と贈答し合った者の詠歌中に、全く別人の詠かと疑われるもの  
は以上の如きものであるが、実際のところそれも疑いはなく、伊勢  
その人の詠であり、仲平の詠であることが証明される。従って、冒  
頭歌物語部の纂集者は構想に附会させるべく、他人の詠を資料、素  
材には使っていない。

次に伊勢の詠歌中、それぞれの詠が真に歌物語部の詞書の如き情  
況下において詠まれたものではなく、詠作情況が全く違っているに  
もかかわらず、文脈に附会させるといった纂集者の作為がないとはい  
えない。そこで問題になるのは、七番の「たちぬはぬ……」の歌  
とこれに関わる長文の詞書である。関根博士が指摘されるところに  
よれば、詠歌と詞書が必然性をもって結合していない。すなわち  
「たちぬはぬ……」の歌の発想は、「雨やふらんとすらんといふは

伊勢における日記文学形成の可能性について

どに、いみじうおほきなるゆきかきくらしふれば、人々歌よまむと  
いふに、このまうでたる人」との詞書から降雪によってなされ  
たものであるが、歌にはならぬ雪に関するものが詠み込まれては  
いず、歌の中心は龍門の滝にある。かかる事由から関根博士はこ  
の部分纂集者の恣意による作為であると見ておられる。詞書  
にあっては、仲平との失恋の傷心をいだきつつ、一時父の任国で  
ある大和に身をさけ、傷心を癒すべく龍門寺に小旅行を試みたの  
であるが、塵介の巷間から隔絶した清麗な山水に身を置いたこと  
は、かえて人として、また女として生きることの悲哀をつくづく  
観照せずにはいられなかつたといった、龍門寺周辺の光景と伊勢  
の心象とがほどよく調和した記述になっている。歌の方もまた単な  
る自然詠ではなくして、秋山虔氏が「伊勢の歌が単なる龍門寺の滝  
の風景に対する趣向の歌ではないこと、いまわが位境をなげく切実  
な思いをこれに托するにほかならないことである。少なくとも伊勢  
日記の作者は、この歌をそう把握しているのであろう」といわれる  
ごとく、眼前に展開する光景に伊勢の心象が托されている。そうで  
あればあるほど、詞書に対して七番の詠は忽然たる観はまぬがれな  
い。ところでこの歌は実際に龍門寺の滝に心象を托して詠じられた  
ものであろうか。たしかに滝を布に見たてた詠は頗る多く、例えば  
この詠は古今集雑歌上に採られているが、その前後の

布引の滝のもとにて人々あつまりて歌

よみける時によめる

業平

923きぬ乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖の狭きに

吉野の滝を見てよめる

承均法師

924 たがために引て洒せる布なれや世をへてみれどとる人もなき

題知らず

神たい法師

925 清滝の瀬のしら糸くりためて山わけ衣おりてきましを

朱雀院の帝布引の滝御覧せんとてふん月の七日の日おほしましてありける時にさぶらふ人々に歌よませ給ひけるによめる

橘 長盛

927 主なくてさらせる布を棚機にわが心とや今日はかきまし

のごとき一連の詠はよき例といえる。しかし、七番は詞書そのままに折しも龍門寺周辺にうつすらと降りうずむ雪、その雪の白さをさらす布と見たてたのではなかったか。ただ降りうずむ雪を晒布に見たてるといふがごとき発想において詠じられた歌は伊勢以前にもその後にあつても管見には入らない。かかる不安は残るにしてもである。失恋の傷心を抱いての小旅行にあつて、たちまちにあたりを純白に染めていく降雪を、山姫が着る人としていない布を晒すという空虚な行爲と見たてたのは、恋と愛の空虚という心象風景にほかならない。いわゆる妻問ひ婚習俗にあつては、仲平という高貴な男との交渉が伊勢のごとき出自の女性にとつて、如何にはかなくむなしいものであるかを切実に体験し、そこに生じた心の傷を浄化し癒す目的でこの小旅行に出かけたのであつて、過ぎしいとわしい思い出をすべて消却することにあつたのであろう。であればこそ後に温子の後宮に再帰してからも挑み寄る仲平をはじめとして、時平、敏相、貞文など、あはつけき男たちを拒絶し通すことにもなつたのである。かかる心境にあつて、龍門寺の光景を詠じた歌であれば、滝をさらす布に見たてるといつた伝統的な発想に拮抗して、一面に降

りうずむ雪をさらす布と見たてるといつた新奇な発想をしたのではなかつたか。伊勢の失恋の悲しみが妻問ひ婚という伝統的習俗の重圧から産出されたものであり、伊勢にとつてはこの重圧に対するせめてもの反撥は、伝統的な和歌の発想を無視して彼女独自の発想をすることではなかつたか。このように七番の歌を解するならば、詞書と歌とは必然性において結合していることになり、纂集者の作爲によるものではなくして、かえつて表面的な詠歌事情だけでなく伊勢の情念の深底までも洞察し得ていたといえるであらう。

また、五、六番の贈答歌

よをうみのあわとうきたるみにしあればうらむることぞかずなかりける

をんなかへし

わたつうみとたのためしことのアせぬれば我ぞがみのうらはうらむる

は贈答事情が定かでない。西本願寺本には「よをうみの……」の前に「この歌返、をとこよみて、ならぎかよりおこせける」とあるが、この詞書は五、六番に置かれたものではなからう。三番の「みわのやま……」は傷心を抱いて大和に一時身を引くことを知らせやつた伊勢の贈歌であり、それに返歌したのが四番「もろこしの……」であつて、「この歌返、をとこよみて……」の詞書は四番の仲平の返歌についての説明である。してみると五、六番の贈答歌についてはなんらの詞書もなく浮き上がつてしまひ、従つて、この贈答歌を非物語化の残存と関根博士が見做されたのも頷ける。これを一步進めて考察されたのは秋山虔氏である。すなわち五、六番の贈

答歌と一四、一五番の贈答歌との措辞が海に關するものであることに着目され、元來この二組の贈答歌が一連のもの、

……はじめのをとこ、しもにおはせよといはせられたれば、うしとおもふ心をしばしといふ心をいはせられたれば

一四よひのまにはやなぐさめよいその神ふりにしとこもうちはらふべく  
かへし

一五わたつうみとなりにしとこをいまさらにはらはずそでやあはと  
きえなむ  
(をとこまたかへし)

五よをうみのあわとうきたるみにしあればうらむることぞかすなかりける  
をんなかへし

六わたつうみとたのめしとこのあせぬれば我ぞわがみのうらはうらむる

のごときではなかつたかと指摘された。このように一連のものとしてみると各歌が緊密に連関しあつていて、誠に卓見というべく、さらに氏はかかる錯簡が生じた理由として、歌物語部纂集者の恣意による変改ではなくして、錯誤であろうと見ておられる。

さらに次に歌物語文脈があつて、歴史的事実と認定し得る事象が時間的に矛盾している箇所があるかどうかの問題である。歌物語部は伊勢の精神生活を時間的にかなり正確に追順しているようであるが、一箇所のみ時間的に矛盾するところが見られる。それは一八番の歌と詞書である。詞書の「さはぎ」は延喜元年正月の菅公謫居事

伊勢における日記文学形成の可能性について

件以外には考えられないこと、またこの事件に關連した「兵衛のすけ」は源敏相であることなど、つとに伴信友が「表章伊勢日記附證」で提言し、その後諸家これにならつて特に異論も提起されていず、疑念のないものと断定していいであらう。とすると染谷進氏も指摘されているごとく、時間的文脈上この部分は歴史的事実に反することになる。すなわち、一八番以後歴史的事実として認定し得るところは二三番の詞書、「つかうまつるみやすどころも、后にみたまひぬ、」また二四番の詞書「かくて、みかどおりさせたまひて二年といふに：」などであつて、前者にあつては温子が立后したのは寛平九年七月廿日、後者にあつては宇多帝が退位なされたのは寛平九年七月三日、二年後昌泰二年十月廿四日に御落飾なされたのである。延喜元年正月の菅公謫居事件がこれらに先立つて文脈上に位置することは大きな矛盾である。この矛盾は如何にして起つたのであろうか。考えられるところの一つは伊勢集の纂集者の無意識裡になされた誤謬であるか、他の一つは伊勢の実人生の時間的序列を無視して歌物語部を主題に統一せんとした改変であるかである。前者については伊勢の実人生が多くの時の流れの中でいつの間にか腫化してしまつて、単に歌仙的な人物としてしか知り得なくなつてしまつた結果、素材を主題に統一しようとしたところから生じた誤謬であるといふことになる。ところで現存伊勢集の成立時については、私家集の歌物語化風潮という一般的傾向に照らして、ほぼ後撰集期の前後になつたものであろうとは関根博士の御見解であるが、この傾向はなにも後撰集期に限つたことではなく、後撰集以後とて残存乃至は継続していいとはいえない。従つて、成立時を後撰集期前後に限

定することはいさか不安を感じないでもない。仮に最下限三十六人集が纂集されたと推定される十一世紀中頃までに成立したとしても、伊勢が無名の一女房に過ぎないのならまだしも、歌仙的な女流歌人としてその名声と経歴は広く膾炙されていたであろうから、いやしくも伊勢の家集を纂集しようとする者であつて、伊勢の実人生に関連して菅公謫居、宇多帝の讓位、御落飾など歴史的事項を時間的にとり違える筈もなからう。してみるとこは伊勢集纂集者の意識的な改変と見るべきであろう。しからば纂集者の改変の意図は那邊にあつたのであろうか。この部分の詞書と歌は単一なものとしてここに置かれたのではない。すでに秋山虔氏も指摘されている如く、一六、七番の贈答歌と一連の文脈のなかに置かれていると見なければなるまい。そうするとこは、大和より帰京して温子の許に再出仕するようになった伊勢は、仲平、時平らの懸想を敢然と退けつつ、さらには一九、二〇、二一番のごとく平中の懸想を問題にせずして、そのまめやかなる態度なるが故に宇多帝の寵愛を獲得するという文脈の中にあつて、仲平、時平、敏相、平中と連続的に男との交渉を拒否することが一見平板な文脈に墮してしまふことも否めない。纂集者はこのことに気づいた結果、一つの起伏を文脈上に布設するべく、この部分を置いたのではなかつたか。すなわち、仲平との恋の破綻を契機として、多くの男たちの挑みをも退けずにはいられなかつた高適な、またかたくなな伊勢の心情にも、偶々流瀆といふ大きな不幸に見まわれた男——それ以前にあつては好きがましき心一つに言い寄らんとしたいとわしい男ではあつたが——に対しては同情の心を与え得るだけの心情は持ち続け得たことを、纂集者はこ

こでいわんとしたのではなかつたらうか。もしそうであるならば、伊勢集纂集者は伊勢の内面生活に深く関わりつつ、これを文脈上に設定せんとしていることになる。かかる時間的、歴史的事実をまで改変して物語文脈を構成したのは、伊勢の実人生とはなんら関わりのない纂集者のフィクションというのではなく、纂集者が伊勢その人に近接した立場にあつたが故であり、あくまで伊勢の精神生活の内部にわけ入りそれを浮彫りせんとしていると見るべきであろう。

### 三

以上のごとく見てくると、伊勢集の纂集者は冒頭部を歌物語化するにあつて、伊勢の詠歌を素材とするに忠実なばかりではなく、伊勢の内面を浮彫りするべく詠作の時間的序列を改変してまでも、精神運動に追順せんとしている。従つて、纂集者は伊勢の実人生の内部に沈潜して、それを歌物語風に語ることに努めており、そこに創り出された一人の女の姿は伊勢その人の精神生活に尠ならず接近しているといえるであろう。とはいつても、歌物語部に描出された一つの女はそれ自体全く伊勢その人でないのもちろんである。実在した一個人の精神生活を詠作を通して凝視し、またその詠作を素材として歌物語風に構成された伊勢集冒頭歌物語部そのものは、作品の形成された時からすでに伊勢その人ではなくして、全く新しい人生の創造なのである。それは伊勢の実人生の忠実な再構成ではなく、全く新しい人生の発見でもある。このことはとりもなおさず日記文学の方法に通じるものがあるといえるであろう。日記文学の方

法は一個の実人生を追体験するところに構築されるとはいいいながら、構築された人生は実人生とは全く別個な自立性をもって客観化されたものに昇華されるところにあるといえるであらうし、よしまた日記文学創作者が素材たる一個の実人生とは全く他者であったにしても、そこに造り出された作品が一つのテーマに統一されているのであれば、これとても日記文学といえるであらう。

しかし、そうであるにしても、秋山虔氏が「単に歌人として歌を詠作するというのではなく、歌にわがいのちの顛擧をかけるひとりの女の人生の痛切な経験と歌でこれに対処し克服しようとする生きかたに内在する生命力に随順する論理を、伊勢日記の作者が把握しえたところにあるであらう。もちろんその作者が伊勢その人であるのかないのか、もしないとすれば誰であるのかという追求はほとんど不可能といつてよいが、伊勢という一個の人間の歌による生きかたをその世界に内在させつつ、一歩ずりの日記の文脈を織りなしてゆくその論理は、伊勢その人にほとんど合同しうる作者であったにちがいない。また現存の形態のごとき伊勢日記を成立せしめるについて、これを強く規制したものととして伊勢当人の當為の先行を想定することもきわめて自然であらう」といわれる如く、伊勢の実人生と冒頭歌物語部の一個の女性の人生とは極めて近接しているのである。従つて冒頭歌物語部には明瞭に日記文学の方法の萌芽が内在していると同時に、この萌芽を内在せしめるに至つた伊勢の実人生そのものにも日記文学の方法が内在していたといえるのではなからうか。それにしても一個の実人生が如何に日記文学的方法的可能性を有していても、作品に定着するには表

伊勢における日記文学形成の可能性について

現方法の発達が前提となつておらねばならぬ。しかし伊勢が生きた時代においては仮名によつて日記するということでの状況はどうであつたか。まず考えられるのは歌合日記である。歌合日記は日記文学形成の場と同一次元には位置していない。それは歌合という集団的形式的な文芸的遊戯に過ぎない行事を実務的に筆録したものに過ぎず、一回限りの実人生を自照することにおいて形成される日記文学とは本質的に異質である。しかし、歌合日記が実務的であらうとも、仮名書きであること、日記するということ、などにおいては共通している。加えて平安朝歌合史上画期的なところに位置している亭子院歌合日記の筆録者を、扶桑拾葉集にあつては伊勢としている。もちろんこのことについて客観的に証明するてではないのだが、本歌合が催された延喜十三年といえは伊勢の歌人としての名声は広く世評にのぼつておつたであらうし、かつては本歌合の主権者たる宇多院の寵幸を受け皇子までも産んでゐる彼女であつてみれば、本歌合の日記を筆録したということも信憑性がないわけではない。また京極御息所斐子歌合の日記、特に十卷本のそれは、萩谷朴氏が「兎も角、服色の記述が頗る詳細適切であるところから見て、更にまた、判詞難陳の描写ぶりよりみても、この十卷本の仮名日記は、女性殊に、亭子院歌合の場合と同じく伊勢御息所あたりの筆になつたものかとの疑いをささへ、抱かしめるものがあるようである」といわれるごとく、亭子院歌合日記との表現上の類似性が明瞭であつて、亭子院歌合日記の筆録者と同一人であることはまず間違いないところであらう。ともあれ亭子院歌合日記、京極御息所斐子歌合日記が伊勢の手によつて成つたものであるとすると、仮名書きに

よる散文表記及び日記することを経験と技術を持っていたことになるのである。一方、伊勢自身の日記するという体験はともかく、伊勢が生きた時代にあつては純粹な意味あいでの日記文学の動向はどうであつたか。伊勢の生きた時限を明らかに比定することは困難であるが、詠作年次が明らかに比定できるもののうち最も新しいものは、醍醐天皇第四皇女勳子内親王の薨去を悼んだ四四七番であり、伊勢は天慶元年十一月以降までも生存したことは明らかである。従つて、伊勢の晩年には土佐日記の成立があつたのである。伊勢が土佐日記を披見したか否かは別としても、また男性官僚と後宮女房の違いはあるにしても、日記文学の胎動は明らかに伊勢の生きた時代には認められるのである。

以上のごとく、伊勢の実人生そのものに日記文学的方法的可能性があつたばかりか、実際にも歌合日記筆録という日記することを体験し、また時代的にも日記文学の胎動はすでに始まっていることなど、伊勢における日記文学形成の可能性は頗る揃つていたといえるであろう。だが、和歌詠作以外に歌合日記は別として、伊勢の手に成る作品、或は纂集物は、古今集撰集時に召に依じて提出したと思われる自纂家集、また伊勢の自撰か他撰か定かではないが、伊勢の自撰であるとするれば、後撰集撰集にあつて中務が村上帝に奉つた家集、さらには現存伊勢集の冒頭歌物語部が形成される前提として、伊勢の自撰家集めいたもの、などの存在したことは推測されるのだが、日記文学が形成された形跡は全く認められない。

しかば伊勢にあつては、日記文学的方法的可能性を多分に内包しながら、それが作品として形成されるに至らなかつたのは、如何

なる理由からであつたか。私は一つの因子を伊勢の文芸環境と和歌詠作活動に見出し得ると思う。伊勢の心の奥深いところに潜む悲哀を浮彫りした冒頭歌物語部に対し、後続家集部に見られる作歌活動はあまりに栄耀に輝き、際立つた対照をなしている。冒頭歌物語部は三二三番の歌で終るともなく途切れた形になっているが、伊勢集纂集過程で如何なる理由で中断、放棄されたかは全く判らない。とはいつても、伊勢の女性として生きることの悲哀が、三二三番の歌が詠じられた時点——察するところ延喜五年から前後にそう遠く離れていない時点——において全く終焉したとは思えない。伊勢の人生の若かりし半生で体験せざるを得なかつた悲哀はより内面化し、深化しこそすれ、減じることとはなかつた筈である。体験から生きることの悲哀を認識し、これが内面化するところには常に強い自照的性癖が生じると思われる。一個の人間の内部に自照性が濃厚に介在するとき、日記文学形成の可能性もまた大きい。一体ものを書くという行為は、それが自照的であればあるほど、内発的な必然性があるのであつて、書かねば生きることができない、否、書くことにおいてのみしか自己を生かす得ないといったものであり、自己を表現するにあまりに真率、真摯な心情であるといえる。と同時に他面、常に読む者——それが個別的であろうとも、不特定であろうとも——も予想していることもまた事実であつて、純粹無垢に自己のために自己を表現するといったことはまずあり得ない。日記文学の形成には常にこの二つの傾向がないまぜに絡みあつていたのであつて、前者の傾向においてのみ日記文学の形成はなく、また後者の傾向のみによつての形成もあり得ないであろう。それにしても実際

に筆を執るということには、後者の傾向が多分に介在している。文学形態の中にあつて、日記文学ほど自己顕示的なものは他にはない。より内面的に深く自照すればするほど、そこに産み出される作品は自己顕示的であり、しかもそれは執筆者自身にあつてもかなり明瞭に意識されていると思われる。自己顕示的であるとの謂は、自己の内面の披瀝であると同時に、自己の文芸の誇示と高揚でもある。

伊勢にあつては、その生涯を通じて女性としての悲哀を体験し続けた結果、自然と自照性においても人一倍濃厚なものがあつたであろうから、自照文学形成の内発的必然性は多分にあつたであらう。一方文芸における自己顕示ということでの意識的必然性という点はどうであつたか。そこで伊勢の歌人としての作歌情況が問題になる。家集三二番の「やまがはの……」の歌はその詞書から古今集撰集にあつて請に應じて提出した自撰家集の存在を想定しせめるが、これは伊勢の歌人としての名声がすでに世に聞えていたことを証するもので、結果として古今集に二二首という多くを採録されたのも当然のことであつた。また後続家集部にあつて、公的な晴れの詠作として製作年次が比定できるもの、或は他の資料から公的な詠作として製作年次が判明するもの、の大概を年次に従つて列挙すると、皇太夫人班子女王歌合に詠進（寛平五年九月以前）、中宮温子の東宮（醍醐帝）の養母時代の屏風歌<sup>(4)</sup>、<sup>(5)</sup>（寛平八〜九年）、亭子院女郎花合に詠進（昌泰元年）、亭子院歌合に詠進<sup>(6)</sup>、<sup>(7)</sup>（延喜一三年）、内侍藤原満子四十賀の屏風歌<sup>(8)</sup>、<sup>(9)</sup>（延喜一三年）、陽成院歌合に詠進<sup>(10)</sup>、<sup>(11)</sup>（延喜一二、三年）、春日歌合（京極御息所襲子歌合）に詠進<sup>(12)</sup>、<sup>(13)</sup>（延喜二一年）、式部郷歌

慶親王前裁合に詠進<sup>(14)</sup>、<sup>(15)</sup>（延長二〜七年秋）、亭子院六十賀の屏風歌<sup>(16)</sup>、<sup>(17)</sup>（延長四年）、八条大将藤原保忠四十賀の屏風歌<sup>(18)</sup>、<sup>(19)</sup>（延長七年）、康子内親王（醍醐帝第十四皇女）初算の屏風歌<sup>(20)</sup>、<sup>(21)</sup>（承平三年）、皇后穩子五十賀の屏風歌<sup>(22)</sup>、<sup>(23)</sup>（承平四年）、陽成院七十賀の「うちみだりのはこ」に詠進（承平七年）など夥しい数になる。さらに詠作年次が比定できない公的な詠作として誰の屏風絵についての詠作か定かでないものが<sup>(24)</sup>、<sup>(25)</sup>、<sup>(26)</sup>、<sup>(27)</sup>、<sup>(28)</sup>、<sup>(29)</sup>、<sup>(30)</sup>、<sup>(31)</sup>、<sup>(32)</sup>、<sup>(33)</sup>、<sup>(34)</sup>、<sup>(35)</sup>、<sup>(36)</sup>、<sup>(37)</sup>、<sup>(38)</sup>、<sup>(39)</sup>、<sup>(40)</sup>、<sup>(41)</sup>、<sup>(42)</sup>、<sup>(43)</sup>、<sup>(44)</sup>、<sup>(45)</sup>、<sup>(46)</sup>、<sup>(47)</sup>、<sup>(48)</sup>、<sup>(49)</sup>、<sup>(50)</sup>、<sup>(51)</sup>、<sup>(52)</sup>、<sup>(53)</sup>、<sup>(54)</sup>、<sup>(55)</sup>、<sup>(56)</sup>、<sup>(57)</sup>、<sup>(58)</sup>、<sup>(59)</sup>、<sup>(60)</sup>、<sup>(61)</sup>、<sup>(62)</sup>、<sup>(63)</sup>、<sup>(64)</sup>、<sup>(65)</sup>、<sup>(66)</sup>、<sup>(67)</sup>、<sup>(68)</sup>、<sup>(69)</sup>、<sup>(70)</sup>、<sup>(71)</sup>、<sup>(72)</sup>、<sup>(73)</sup>、<sup>(74)</sup>、<sup>(75)</sup>、<sup>(76)</sup>、<sup>(77)</sup>、<sup>(78)</sup>、<sup>(79)</sup>、<sup>(80)</sup>、<sup>(81)</sup>、<sup>(82)</sup>、<sup>(83)</sup>、<sup>(84)</sup>、<sup>(85)</sup>、<sup>(86)</sup>、<sup>(87)</sup>、<sup>(88)</sup>、<sup>(89)</sup>、<sup>(90)</sup>、<sup>(91)</sup>、<sup>(92)</sup>、<sup>(93)</sup>、<sup>(94)</sup>、<sup>(95)</sup>、<sup>(96)</sup>、<sup>(97)</sup>、<sup>(98)</sup>、<sup>(99)</sup>、<sup>(100)</sup>、<sup>(101)</sup>、<sup>(102)</sup>、<sup>(103)</sup>、<sup>(104)</sup>、<sup>(105)</sup>、<sup>(106)</sup>、<sup>(107)</sup>、<sup>(108)</sup>、<sup>(109)</sup>、<sup>(110)</sup>、<sup>(111)</sup>、<sup>(112)</sup>、<sup>(113)</sup>、<sup>(114)</sup>、<sup>(115)</sup>、<sup>(116)</sup>、<sup>(117)</sup>、<sup>(118)</sup>、<sup>(119)</sup>、<sup>(120)</sup>、<sup>(121)</sup>、<sup>(122)</sup>、<sup>(123)</sup>、<sup>(124)</sup>、<sup>(125)</sup>、<sup>(126)</sup>、<sup>(127)</sup>、<sup>(128)</sup>、<sup>(129)</sup>、<sup>(130)</sup>、<sup>(131)</sup>、<sup>(132)</sup>、<sup>(133)</sup>、<sup>(134)</sup>、<sup>(135)</sup>、<sup>(136)</sup>、<sup>(137)</sup>、<sup>(138)</sup>、<sup>(139)</sup>、<sup>(140)</sup>、<sup>(141)</sup>、<sup>(142)</sup>、<sup>(143)</sup>、<sup>(144)</sup>、<sup>(145)</sup>、<sup>(146)</sup>、<sup>(147)</sup>、<sup>(148)</sup>、<sup>(149)</sup>、<sup>(150)</sup>、<sup>(151)</sup>、<sup>(152)</sup>、<sup>(153)</sup>、<sup>(154)</sup>、<sup>(155)</sup>、<sup>(156)</sup>、<sup>(157)</sup>、<sup>(158)</sup>、<sup>(159)</sup>、<sup>(160)</sup>、<sup>(161)</sup>、<sup>(162)</sup>、<sup>(163)</sup>、<sup>(164)</sup>、<sup>(165)</sup>、<sup>(166)</sup>、<sup>(167)</sup>、<sup>(168)</sup>、<sup>(169)</sup>、<sup>(170)</sup>、<sup>(171)</sup>、<sup>(172)</sup>、<sup>(173)</sup>、<sup>(174)</sup>、<sup>(175)</sup>、<sup>(176)</sup>、<sup>(177)</sup>、<sup>(178)</sup>、<sup>(179)</sup>、<sup>(180)</sup>、<sup>(181)</sup>、<sup>(182)</sup>、<sup>(183)</sup>、<sup>(184)</sup>、<sup>(185)</sup>、<sup>(186)</sup>、<sup>(187)</sup>、<sup>(188)</sup>、<sup>(189)</sup>、<sup>(190)</sup>、<sup>(191)</sup>、<sup>(192)</sup>、<sup>(193)</sup>、<sup>(194)</sup>、<sup>(195)</sup>、<sup>(196)</sup>、<sup>(197)</sup>、<sup>(198)</sup>、<sup>(199)</sup>、<sup>(200)</sup>、<sup>(201)</sup>、<sup>(202)</sup>、<sup>(203)</sup>、<sup>(204)</sup>、<sup>(205)</sup>、<sup>(206)</sup>、<sup>(207)</sup>、<sup>(208)</sup>、<sup>(209)</sup>、<sup>(210)</sup>、<sup>(211)</sup>、<sup>(212)</sup>、<sup>(213)</sup>、<sup>(214)</sup>、<sup>(215)</sup>、<sup>(216)</sup>、<sup>(217)</sup>、<sup>(218)</sup>、<sup>(219)</sup>、<sup>(220)</sup>、<sup>(221)</sup>、<sup>(222)</sup>、<sup>(223)</sup>、<sup>(224)</sup>、<sup>(225)</sup>、<sup>(226)</sup>、<sup>(227)</sup>、<sup>(228)</sup>、<sup>(229)</sup>、<sup>(230)</sup>、<sup>(231)</sup>、<sup>(232)</sup>、<sup>(233)</sup>、<sup>(234)</sup>、<sup>(235)</sup>、<sup>(236)</sup>、<sup>(237)</sup>、<sup>(238)</sup>、<sup>(239)</sup>、<sup>(240)</sup>、<sup>(241)</sup>、<sup>(242)</sup>、<sup>(243)</sup>、<sup>(244)</sup>、<sup>(245)</sup>、<sup>(246)</sup>、<sup>(247)</sup>、<sup>(248)</sup>、<sup>(249)</sup>、<sup>(250)</sup>、<sup>(251)</sup>、<sup>(252)</sup>、<sup>(253)</sup>、<sup>(254)</sup>、<sup>(255)</sup>、<sup>(256)</sup>、<sup>(257)</sup>、<sup>(258)</sup>、<sup>(259)</sup>、<sup>(260)</sup>、<sup>(261)</sup>、<sup>(262)</sup>、<sup>(263)</sup>、<sup>(264)</sup>、<sup>(265)</sup>、<sup>(266)</sup>、<sup>(267)</sup>、<sup>(268)</sup>、<sup>(269)</sup>、<sup>(270)</sup>、<sup>(271)</sup>、<sup>(272)</sup>、<sup>(273)</sup>、<sup>(274)</sup>、<sup>(275)</sup>、<sup>(276)</sup>、<sup>(277)</sup>、<sup>(278)</sup>、<sup>(279)</sup>、<sup>(280)</sup>、<sup>(281)</sup>、<sup>(282)</sup>、<sup>(283)</sup>、<sup>(284)</sup>、<sup>(285)</sup>、<sup>(286)</sup>、<sup>(287)</sup>、<sup>(288)</sup>、<sup>(289)</sup>、<sup>(290)</sup>、<sup>(291)</sup>、<sup>(292)</sup>、<sup>(293)</sup>、<sup>(294)</sup>、<sup>(295)</sup>、<sup>(296)</sup>、<sup>(297)</sup>、<sup>(298)</sup>、<sup>(299)</sup>、<sup>(300)</sup>、<sup>(301)</sup>、<sup>(302)</sup>、<sup>(303)</sup>、<sup>(304)</sup>、<sup>(305)</sup>、<sup>(306)</sup>、<sup>(307)</sup>、<sup>(308)</sup>、<sup>(309)</sup>、<sup>(310)</sup>、<sup>(311)</sup>、<sup>(312)</sup>、<sup>(313)</sup>、<sup>(314)</sup>、<sup>(315)</sup>、<sup>(316)</sup>、<sup>(317)</sup>、<sup>(318)</sup>、<sup>(319)</sup>、<sup>(320)</sup>、<sup>(321)</sup>、<sup>(322)</sup>、<sup>(323)</sup>、<sup>(324)</sup>、<sup>(325)</sup>、<sup>(326)</sup>、<sup>(327)</sup>、<sup>(328)</sup>、<sup>(329)</sup>、<sup>(330)</sup>、<sup>(331)</sup>、<sup>(332)</sup>、<sup>(333)</sup>、<sup>(334)</sup>、<sup>(335)</sup>、<sup>(336)</sup>、<sup>(337)</sup>、<sup>(338)</sup>、<sup>(339)</sup>、<sup>(340)</sup>、<sup>(341)</sup>、<sup>(342)</sup>、<sup>(343)</sup>、<sup>(344)</sup>、<sup>(345)</sup>、<sup>(346)</sup>、<sup>(347)</sup>、<sup>(348)</sup>、<sup>(349)</sup>、<sup>(350)</sup>、<sup>(351)</sup>、<sup>(352)</sup>、<sup>(353)</sup>、<sup>(354)</sup>、<sup>(355)</sup>、<sup>(356)</sup>、<sup>(357)</sup>、<sup>(358)</sup>、<sup>(359)</sup>、<sup>(360)</sup>、<sup>(361)</sup>、<sup>(362)</sup>、<sup>(363)</sup>、<sup>(364)</sup>、<sup>(365)</sup>、<sup>(366)</sup>、<sup>(367)</sup>、<sup>(368)</sup>、<sup>(369)</sup>、<sup>(370)</sup>、<sup>(371)</sup>、<sup>(372)</sup>、<sup>(373)</sup>、<sup>(374)</sup>、<sup>(375)</sup>、<sup>(376)</sup>、<sup>(377)</sup>、<sup>(378)</sup>、<sup>(379)</sup>、<sup>(380)</sup>、<sup>(381)</sup>、<sup>(382)</sup>、<sup>(383)</sup>、<sup>(384)</sup>、<sup>(385)</sup>、<sup>(386)</sup>、<sup>(387)</sup>、<sup>(388)</sup>、<sup>(389)</sup>、<sup>(390)</sup>、<sup>(391)</sup>、<sup>(392)</sup>、<sup>(393)</sup>、<sup>(394)</sup>、<sup>(395)</sup>、<sup>(396)</sup>、<sup>(397)</sup>、<sup>(398)</sup>、<sup>(399)</sup>、<sup>(400)</sup>、<sup>(401)</sup>、<sup>(402)</sup>、<sup>(403)</sup>、<sup>(404)</sup>、<sup>(405)</sup>、<sup>(406)</sup>、<sup>(407)</sup>、<sup>(408)</sup>、<sup>(409)</sup>、<sup>(410)</sup>、<sup>(411)</sup>、<sup>(412)</sup>、<sup>(413)</sup>、<sup>(414)</sup>、<sup>(415)</sup>、<sup>(416)</sup>、<sup>(417)</sup>、<sup>(418)</sup>、<sup>(419)</sup>、<sup>(420)</sup>、<sup>(421)</sup>、<sup>(422)</sup>、<sup>(423)</sup>、<sup>(424)</sup>、<sup>(425)</sup>、<sup>(426)</sup>、<sup>(427)</sup>、<sup>(428)</sup>、<sup>(429)</sup>、<sup>(430)</sup>、<sup>(431)</sup>、<sup>(432)</sup>、<sup>(433)</sup>、<sup>(434)</sup>、<sup>(435)</sup>、<sup>(436)</sup>、<sup>(437)</sup>、<sup>(438)</sup>、<sup>(439)</sup>、<sup>(440)</sup>、<sup>(441)</sup>、<sup>(442)</sup>、<sup>(443)</sup>、<sup>(444)</sup>、<sup>(445)</sup>、<sup>(446)</sup>、<sup>(447)</sup>、<sup>(448)</sup>、<sup>(449)</sup>、<sup>(450)</sup>、<sup>(451)</sup>、<sup>(452)</sup>、<sup>(453)</sup>、<sup>(454)</sup>、<sup>(455)</sup>、<sup>(456)</sup>、<sup>(457)</sup>、<sup>(458)</sup>、<sup>(459)</sup>、<sup>(460)</sup>、<sup>(461)</sup>、<sup>(462)</sup>、<sup>(463)</sup>、<sup>(464)</sup>、<sup>(465)</sup>、<sup>(466)</sup>、<sup>(467)</sup>、<sup>(468)</sup>、<sup>(469)</sup>、<sup>(470)</sup>、<sup>(471)</sup>、<sup>(472)</sup>、<sup>(473)</sup>、<sup>(474)</sup>、<sup>(475)</sup>、<sup>(476)</sup>、<sup>(477)</sup>、<sup>(478)</sup>、<sup>(479)</sup>、<sup>(480)</sup>、<sup>(481)</sup>、<sup>(482)</sup>、<sup>(483)</sup>、<sup>(484)</sup>、<sup>(485)</sup>、<sup>(486)</sup>、<sup>(487)</sup>、<sup>(488)</sup>、<sup>(489)</sup>、<sup>(490)</sup>、<sup>(491)</sup>、<sup>(492)</sup>、<sup>(493)</sup>、<sup>(494)</sup>、<sup>(495)</sup>、<sup>(496)</sup>、<sup>(497)</sup>、<sup>(498)</sup>、<sup>(499)</sup>、<sup>(500)</sup>、<sup>(501)</sup>、<sup>(502)</sup>、<sup>(503)</sup>、<sup>(504)</sup>、<sup>(505)</sup>、<sup>(506)</sup>、<sup>(507)</sup>、<sup>(508)</sup>、<sup>(509)</sup>、<sup>(510)</sup>、<sup>(511)</sup>、<sup>(512)</sup>、<sup>(513)</sup>、<sup>(514)</sup>、<sup>(515)</sup>、<sup>(516)</sup>、<sup>(517)</sup>、<sup>(518)</sup>、<sup>(519)</sup>、<sup>(520)</sup>、<sup>(521)</sup>、<sup>(522)</sup>、<sup>(523)</sup>、<sup>(524)</sup>、<sup>(525)</sup>、<sup>(526)</sup>、<sup>(527)</sup>、<sup>(528)</sup>、<sup>(529)</sup>、<sup>(530)</sup>、<sup>(531)</sup>、<sup>(532)</sup>、<sup>(533)</sup>、<sup>(534)</sup>、<sup>(535)</sup>、<sup>(536)</sup>、<sup>(537)</sup>、<sup>(538)</sup>、<sup>(539)</sup>、<sup>(540)</sup>、<sup>(541)</sup>、<sup>(542)</sup>、<sup>(543)</sup>、<sup>(544)</sup>、<sup>(545)</sup>、<sup>(546)</sup>、<sup>(547)</sup>、<sup>(548)</sup>、<sup>(549)</sup>、<sup>(550)</sup>、<sup>(551)</sup>、<sup>(552)</sup>、<sup>(553)</sup>、<sup>(554)</sup>、<sup>(555)</sup>、<sup>(556)</sup>、<sup>(557)</sup>、<sup>(558)</sup>、<sup>(559)</sup>、<sup>(560)</sup>、<sup>(561)</sup>、<sup>(562)</sup>、<sup>(563)</sup>、<sup>(564)</sup>、<sup>(565)</sup>、<sup>(566)</sup>、<sup>(567)</sup>、<sup>(568)</sup>、<sup>(569)</sup>、<sup>(570)</sup>、<sup>(571)</sup>、<sup>(572)</sup>、<sup>(573)</sup>、<sup>(574)</sup>、<sup>(575)</sup>、<sup>(576)</sup>、<sup>(577)</sup>、<sup>(578)</sup>、<sup>(579)</sup>、<sup>(580)</sup>、<sup>(581)</sup>、<sup>(582)</sup>、<sup>(583)</sup>、<sup>(584)</sup>、<sup>(585)</sup>、<sup>(586)</sup>、<sup>(587)</sup>、<sup>(588)</sup>、<sup>(589)</sup>、<sup>(590)</sup>、<sup>(591)</sup>、<sup>(592)</sup>、<sup>(593)</sup>、<sup>(594)</sup>、<sup>(595)</sup>、<sup>(596)</sup>、<sup>(597)</sup>、<sup>(598)</sup>、<sup>(599)</sup>、<sup>(600)</sup>、<sup>(601)</sup>、<sup>(602)</sup>、<sup>(603)</sup>、<sup>(604)</sup>、<sup>(605)</sup>、<sup>(606)</sup>、<sup>(607)</sup>、<sup>(608)</sup>、<sup>(609)</sup>、<sup>(610)</sup>、<sup>(611)</sup>、<sup>(612)</sup>、<sup>(613)</sup>、<sup>(614)</sup>、<sup>(615)</sup>、<sup>(616)</sup>、<sup>(617)</sup>、<sup>(618)</sup>、<sup>(619)</sup>、<sup>(620)</sup>、<sup>(621)</sup>、<sup>(622)</sup>、<sup>(623)</sup>、<sup>(624)</sup>、<sup>(625)</sup>、<sup>(626)</sup>、<sup>(627)</sup>、<sup>(628)</sup>、<sup>(629)</sup>、<sup>(630)</sup>、<sup>(631)</sup>、<sup>(632)</sup>、<sup>(633)</sup>、<sup>(634)</sup>、<sup>(635)</sup>、<sup>(636)</sup>、<sup>(637)</sup>、<sup>(638)</sup>、<sup>(639)</sup>、<sup>(640)</sup>、<sup>(641)</sup>、<sup>(642)</sup>、<sup>(643)</sup>、<sup>(644)</sup>、<sup>(645)</sup>、<sup>(646)</sup>、<sup>(647)</sup>、<sup>(648)</sup>、<sup>(649)</sup>、<sup>(650)</sup>、<sup>(651)</sup>、<sup>(652)</sup>、<sup>(653)</sup>、<sup>(654)</sup>、<sup>(655)</sup>、<sup>(656)</sup>、<sup>(657)</sup>、<sup>(658)</sup>、<sup>(659)</sup>、<sup>(660)</sup>、<sup>(661)</sup>、<sup>(662)</sup>、<sup>(663)</sup>、<sup>(664)</sup>、<sup>(665)</sup>、<sup>(666)</sup>、<sup>(667)</sup>、<sup>(668)</sup>、<sup>(669)</sup>、<sup>(670)</sup>、<sup>(671)</sup>、<sup>(672)</sup>、<sup>(673)</sup>、<sup>(674)</sup>、<sup>(675)</sup>、<sup>(676)</sup>、<sup>(677)</sup>、<sup>(678)</sup>、<sup>(679)</sup>、<sup>(680)</sup>、<sup>(681)</sup>、<sup>(682)</sup>、<sup>(683)</sup>、<sup>(684)</sup>、<sup>(685)</sup>、<sup>(686)</sup>、<sup>(687)</sup>、<sup>(688)</sup>、<sup>(689)</sup>、<sup>(690)</sup>、<sup>(691)</sup>、<sup>(692)</sup>、<sup>(693)</sup>、<sup>(694)</sup>、<sup>(695)</sup>、<sup>(696)</sup>、<sup>(697)</sup>、<sup>(698)</sup>、<sup>(699)</sup>、<sup>(700)</sup>、<sup>(701)</sup>、<sup>(702)</sup>、<sup>(703)</sup>、<sup>(704)</sup>、<sup>(705)</sup>、<sup>(706)</sup>、<sup>(707)</sup>、<sup>(708)</sup>、<sup>(709)</sup>、<sup>(710)</sup>、<sup>(711)</sup>、<sup>(712)</sup>、<sup>(713)</sup>、<sup>(714)</sup>、<sup>(715)</sup>、<sup>(716)</sup>、<sup>(717)</sup>、<sup>(718)</sup>、<sup>(719)</sup>、<sup>(720)</sup>、<sup>(721)</sup>、<sup>(722)</sup>、<sup>(723)</sup>、<sup>(724)</sup>、<sup>(725)</sup>、<sup>(726)</sup>、<sup>(727)</sup>、<sup>(728)</sup>、<sup>(729)</sup>、<sup>(730)</sup>、<sup>(731)</sup>、<sup>(732)</sup>、<sup>(733)</sup>、<sup>(734)</sup>、<sup>(735)</sup>、<sup>(736)</sup>、<sup>(737)</sup>、<sup>(738)</sup>、<sup>(739)</sup>、<sup>(740)</sup>、<sup>(741)</sup>、<sup>(742)</sup>、<sup>(743)</sup>、<sup>(744)</sup>、<sup>(745)</sup>、<sup>(746)</sup>、<sup>(747)</sup>、<sup>(748)</sup>、<sup>(749)</sup>、<sup>(750)</sup>、<sup>(751)</sup>、<sup>(752)</sup>、<sup>(753)</sup>、<sup>(754)</sup>、<sup>(755)</sup>、<sup>(756)</sup>、<sup>(757)</sup>、<sup>(758)</sup>、<sup>(759)</sup>、<sup>(760)</sup>、<sup>(761)</sup>、<sup>(762)</sup>、<sup>(763)</sup>、<sup>(764)</sup>、<sup>(765)</sup>、<sup>(766)</sup>、<sup>(767)</sup>、<sup>(768)</sup>、<sup>(769)</sup>、<sup>(770)</sup>、<sup>(771)</sup>、<sup>(772)</sup>、<sup>(773)</sup>、<sup>(774)</sup>、<sup>(775)</sup>、<sup>(776)</sup>、<sup>(777)</sup>、<sup>(778)</sup>、<sup>(779)</sup>、<sup>(780)</sup>、<sup>(781)</sup>、<sup>(782)</sup>、<sup>(783)</sup>、<sup>(784)</sup>、<sup>(785)</sup>、<sup>(786)</sup>、<sup>(787)</sup>、<sup>(788)</sup>、<sup>(789)</sup>、<sup>(790)</sup>、<sup>(791)</sup>、<sup>(792)</sup>、<sup>(793)</sup>、<sup>(794)</sup>、<sup>(795)</sup>、<sup>(796)</sup>、<sup>(797)</sup>、<sup>(798)</sup>、<sup>(799)</sup>、<sup>(800)</sup>、<sup>(801)</sup>、<sup>(802)</sup>、<sup>(803)</sup>、<sup>(804)</sup>、<sup>(805)</sup>、<sup>(806)</sup>、<sup>(807)</sup>、<sup>(808)</sup>、<sup>(809)</sup>、<sup>(810)</sup>、<sup>(811)</sup>、<sup>(812)</sup>、<sup>(813)</sup>、<sup>(814)</sup>、<sup>(815)</sup>、<sup>(816)</sup>、<sup>(817)</sup>、<sup>(818)</sup>、<sup>(819)</sup>、<sup>(820)</sup>、<sup>(821)</sup>、<sup>(822)</sup>、<sup>(823)</sup>、<sup>(824)</sup>、<sup>(825)</sup>、<sup>(826)</sup>、<sup>(827)</sup>、<sup>(828)</sup>、<sup>(829)</sup>、<sup>(830)</sup>、<sup>(831)</sup>、<sup>(832)</sup>、<sup>(833)</sup>、<sup>(834)</sup>、<sup>(835)</sup>、<sup>(836)</sup>、<sup>(837)</sup>、<sup>(838)</sup>、<sup>(839)</sup>、<sup>(840)</sup>、<sup>(841)</sup>、<sup>(842)</sup>、<sup>(843)</sup>、<sup>(844)</sup>、<sup>(845)</sup>、<sup>(846)</sup>、<sup>(847)</sup>、<sup>(848)</sup>、<sup>(849)</sup>、<sup>(850)</sup>、<sup>(851)</sup>、<sup>(852)</sup>、<sup>(853)</sup>、<sup>(854)</sup>、<sup>(855)</sup>、<sup>(856)</sup>、<sup>(857)</sup>、<sup>(858)</sup>、<sup>(859)</sup>、<sup>(860)</sup>、<sup>(861)</sup>、<sup>(862)</sup>、<sup>(863)</sup>、<sup>(864)</sup>、<sup>(865)</sup>、<sup>(866)</sup>、<sup>(867)</sup>、<sup>(868)</sup>、<sup>(869)</sup>、<sup>(870)</sup>、<sup>(871)</sup>、<sup>(872)</sup>、<sup>(873)</sup>、<sup>(874)</sup>、<sup>(875)</sup>、<sup>(876)</sup>、<sup>(877)</sup>、<sup>(878)</sup>、<sup>(879)</sup>、<sup>(880)</sup>、<sup>(881)</sup>、<sup>(882)</sup>、<sup>(883)</sup>、<sup>(884)</sup>、<sup>(885)</sup>、<sup>(886)</sup>、<sup>(887)</sup>、<sup>(888)</sup>、<sup>(889)</sup>、<sup>(890)</sup>、<sup>(891)</sup>、<sup>(892)</sup>、<sup>(893)</sup>、<sup>(894)</sup>、<sup>(895)</sup>、<sup>(896)</sup>、<sup>(897)</sup>、<sup>(898)</sup>、<sup>(899)</sup>、<sup>(900)</sup>、<sup>(901)</sup>、<sup>(902)</sup>、<sup>(903)</sup>、<sup>(904)</sup>、<sup>(905)</sup>、<sup>(906)</sup>、<sup>(907)</sup>、<sup>(908)</sup>、<sup>(909)</sup>、<sup>(910)</sup>、<sup>(911)</sup>、<sup>(912)</sup>、<sup>(913)</sup>、<sup>(914)</sup>、<sup>(915)</sup>、<sup>(916)</sup>、<sup>(917)</sup>、<sup>(918)</sup>、<sup>(919)</sup>、<sup>(920)</sup>、<sup>(921)</sup>、<sup>(922)</sup>、<sup>(923)</sup>、<sup>(924)</sup>、<sup>(925)</sup>、<sup>(926)</sup>、<sup>(927)</sup>、<sup>(928)</sup>、<sup>(929)</sup>、<sup>(930)</sup>、<sup>(931)</sup>、<sup>(932)</sup>、<sup>(933)</sup>、<sup>(934)</sup>、<sup>(935)</sup>、<sup>(936)</sup>、<sup>(937)</sup>、<sup>(938)</sup>、<sup>(939)</sup>、<sup>(940)</sup>、<sup>(941)</sup>、<sup>(942)</sup>、<sup>(943)</sup>、<sup>(944)</sup>、<sup>(945)</sup>、<sup>(946)</sup>、<sup>(947)</sup>、<sup>(948)</sup>、<sup>(949)</sup>、<sup>(950)</sup>、<sup>(951)</sup>、<sup>(952)</sup>、<sup>(953)</sup>、<sup>(954)</sup>、<sup>(955)</sup>、<sup>(956)</sup>、<sup>(957)</sup>、<sup>(958)</sup>、<sup>(959)</sup>、<sup>(960)</sup>、<sup>(961)</sup>、<sup>(962)</sup>、<sup>(963)</sup>、<sup>(964)</sup>、<sup>(965)</sup>、<sup>(966)</sup>、<sup>(967)</sup>、<sup>(968)</sup>、<sup>(969)</sup>、<sup>(970)</sup>、<sup>(971)</sup>、<sup>(972)</sup>、<sup>(973)</sup>、<sup>(974)</sup>、<sup>(975)</sup>、<sup>(976)</sup>、<sup>(977)</sup>、<sup>(978)</sup>、<sup>(979)</sup>、<sup>(980)</sup>、<sup>(981)</sup>、<sup>(982)</sup>、<sup>(983)</sup>、<sup>(984)</sup>、<sup>(985)</sup>、<sup>(986)</sup>、<sup>(987)</sup>、<sup>(988)</sup>、<sup>(989)</sup>、<sup>(990)</sup>、<sup>(991)</sup>、<sup>(992)</sup>、<sup>(993)</sup>、<sup>(994)</sup>、<sup>(995)</sup>、<sup>(996)</sup>、<sup>(997)</sup>、<sup>(998)</sup>、<sup>(999)</sup>、<sup>(1000)</sup>、<sup>(1001)</sup>、<sup>(1002)</sup>、<sup>(1003)</sup>、<sup>(1004)</sup>、<sup>(1005)</sup>、<sup>(1006)</sup>、<sup>(1007)</sup>、<sup>(1008)</sup>、<sup>(1009)</sup>、<sup>(1010)</sup>、<sup>(1011)</sup>、<sup>(1012)</sup>、<sup>(1013)</sup>、<sup>(1014)</sup>、<sup>(1015)</sup>、<sup>(1016)</sup>、<sup>(1017)</sup>、<sup>(1018)</sup>、<sup>(1019)</sup>、<sup>(1020)</sup>、<sup>(1021)</sup>、<sup>(1022)</sup>、<sup>(1023)</sup>、<sup>(1024)</sup>、<sup>(1025)</sup>、<sup>(1026)</sup>、<sup>(1027)</sup>、<sup>(1028)</sup>、<sup>(1029)</sup>、<sup>(1030)</sup>、<sup>(1031)</sup>、<sup>(1032)</sup>、<sup>(1033)</sup>、<sup>(1034)</sup>、<sup>(1035)</sup>、<sup>(1036)</sup>、<sup>(1037)</sup>、<sup>(1038)</sup>、<sup>(1039)</sup>、<sup>(1040)</sup>、<sup>(1041)</sup>、<sup>(1042)</sup>、<sup>(1043)</sup>、<sup>(1044)</sup>、<sup>(1045)</sup>、<sup>(1046)</sup>、<sup>(1047)</sup>、<sup>(1048)</sup>、<sup>(1049)</sup>、<sup>(1050)</sup>、<sup>(1051)</sup>、<sup>(1052)</sup>、<sup>(1053)</sup>、<sup>(1054)</sup>、<sup>(1055)</sup>、<sup>(1056)</sup>、<sup>(1057)</sup>、<sup>(1058)</sup>、<sup>(1059)</sup>、<sup>(1060)</sup>、<sup>(1061)</sup>、<sup>(1062)</sup>、<sup>(1063)</sup>、<sup>(1064)</sup>、<sup>(1065)</sup>、<sup>(1066)</sup>、<sup>(1067)</sup>、<sup>(1068)</sup>、<sup>(1069)</sup>、<sup>(1070)</sup>、<sup>(1071)</sup>、<sup>(1072)</sup>、<sup>(1073)</sup>、<sup>(1074)</sup>、<sup>(1075)</sup>、<sup>(1076)</sup>、<sup>(1077)</sup>、<sup>(1078)</sup>、<sup>(1079)</sup>、<sup>(1080)</sup>、<sup>(1081)</sup>、<sup>(1082)</sup>、<sup>(1083)</sup>、<sup>(1084)</sup>、<sup>(1085)</sup>、<sup>(1086)</sup>、<sup>(1087)</sup>、<sup>(1088)</sup>、<sup>(1089)</sup>、<sup>(1090)</sup>、<sup>(1091)</sup>、<sup>(1092)</sup>、<sup>(1093)</sup>、<sup>(1094)</sup>、<sup>(1095)</sup>、<sup>(1096)</sup>、<sup>(1097)</sup>、<sup>(1098)</sup>、<sup>(1099)</sup>、<sup>(1100)</sup>、<sup>(1101)</sup>、<sup>(1102)</sup>、<sup>(1103)</sup>、<sup>(1104)</sup>、<sup>(1105)</sup>、<sup>(1106)</sup>、<sup>(1107)</sup>、<sup>(1108)</sup>、<sup>(1109)</sup>、<sup>(1110)</sup>、<sup>(1111)</sup>、<sup>(1112)</sup>、<sup>(1113)</sup>、<sup>(1114)</sup>、<sup>(1115)</sup>、<sup>(1116)</sup>、<sup>(1117)</sup>、<sup>(1118)</sup>、<sup>(1119)</sup>、<sup>(1120)</sup>、<sup>(1121)</sup>、<sup>(1122)</sup>、<sup>(1123)</sup>、<sup>(1124)</sup>、<sup>(1125)</sup>、<sup>(1126)</sup>、<sup>(1127)</sup>、<sup>(1128)</sup>、<sup>(1129)</sup>、<sup>(1130)</sup>、<sup>(1131)</sup>、<sup>(1132)</sup>、<sup>(1133)</sup>、<sup>(1134)</sup>、<sup>(1135)</sup>、<sup>(1136)</sup>、<sup>(1137)</sup>、<sup>(1138)</sup>、<sup>(1139)</sup>、<sup>(1140)</sup>、<sup>(1141)</sup>、<sup>(1142)</sup>、<sup>(1143)</sup>、<sup>(1144)</sup>、<sup>(1145)</sup>、<sup>(1146)</sup>、<sup>(1147)</sup>、<sup>(1148)</sup>、<sup>(1149)</sup>、<sup>(1150)</sup>、<sup>(1151)</sup>、<sup>(1152)</sup>、<sup>(1153)</sup>、<sup>(1154)</sup>、<sup>(1155)</sup>、<sup>(1156)</sup>、<sup>(1157)</sup>、<sup>(1158)</sup>、<sup>(1159)</sup>、<sup>(1160)</sup>、<sup>(1161)</sup>、<sup>(1162)</sup>、<sup>(1163)</sup>、<sup>(1164)</sup>、<sup>(</sup>

歌物語化風潮という傾向に照らして後撰集期の前後とする御説があるが、これに従えば冒頭歌物語部は女流日記文学の嚆矢たる蜻蛉日記に先行することになり、女流日記文学の形成を考える上からすれば、高度に熟した日記文学作品ではないにしても、日記文学の方法的萌芽が内在しているが故に好都合である。しかしながら、私家集の歌物語化風潮は、単に後撰集の歌物語的特徴に照らしての推定であり、私家集の歌物語化は必ずしも後撰集期前後に限定されるべきものとも思えず、それ以後も残存、継続しているものと思われる。従って、伊勢集冒頭歌物語部を蜻蛉日記に先行するものとして、女流日記文学の形成の史的考察の中に位置づけることにはいささか不安を禁じ得ない。

1、玉井幸助氏「日記文学の研究」総説

2、岡崎知子氏「伊勢伝考」『大谷学報』四一ノ四、四三ノ一、

二

3、関根慶子氏「中古私家集の研究」第二部「伊勢集の研究」。

以下同氏の御見解は同書による。

4、以下の歌番号は、説明なきものはすべて、西本願寺本の歌番号を示す。

5、山口博氏「撰関家歌壇と私家集」『王朝歌壇の研究』所収

6、鈴木一雄氏「素性集について」『国語と国文学』昭和三十一年

五月

7、吉田堯文氏「業平集の研究」『国語国文』昭和九年六月

8、鈴木知太郎氏「在中将集の成立について」『文学』昭和一一

年一月

9、秋山虔氏「王朝女流文学の形成」『伊勢日記解』

10、9に同じ。

11、染谷進氏「伊勢集の歌物語について」『榎の木』昭和十三年

九一〇月

12、9に同じ。

13、9に同じ。

14、萩谷朴氏「平安朝歌合大成」第一巻

15、（ ）内数字は、西本願寺本伊勢集の歌番号を示す。以下同

じ。